

令和5年度 学校自己評価

鈴鹿市立稲生小学校

評価項目	本年度の活動(具体的な手立て)と指標	学校関係者評価	今後の改善点
学力向上	<p>◆ 授業改善</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自ら考え、共に高め合おうとする子どもの育成 →全学年での研究授業の実施。全職員が授業公開1回以上、参観10回以上 ・わかる喜び、学ぶ楽しさを実感、できる授業づくり →学校アンケートによる検証 →児童のノートを教員同士で見合う機会の設定:2回以上 <p>(成果と課題)</p> <p>○ 全学年で全体公開授業又は学年部公開授業を実施。また、11月～約1か月に1度以上全学級で授業公開・授業参観後に意見交流を行い、授業改善に努めることができた。</p> <p>△ 児童のノートを見合う機会を2回以上実施した教職員は64%(教職員アンケートより)。担任、専科問わず、今後も研鑽していく。</p> <p>◆ 学習規律</p> <ul style="list-style-type: none"> ・聞き方・話し方、書き方などの学習規律の定着 <p>(成果と課題)</p> <p>○ 聴き名人・話し名人の指導、掲示による啓発を全学級で実施し、一定の成果がみられた。</p> <p>△ 人権教育・特別支援教育部や生活指導部と連携し、安心して過ごせる学級づくりと並行して取り組みを進める必要がある。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・継続していただきたい。 ・わかる授業!! 授業で勝負!!の意気込みをよろしく願いたい。 ・昨年よりも授業改善を重点課題とし、具体的な目標を設定して取組を進めてきたことがわかる。 ・ノートを見合う活動、ぜひ進めてほしい。 ・児童のノートを見合う機会を目標に挙げていることはよい。多忙な中で、難しいところもあると思われるが、自らの事業改善と学年、教科等のチームとして指導力を高めていく上で、よい試みだと思う。 ・児童を担任・専科問わず、すべての職員で守ってほしい。 ・授業参観をみて感じたが児童の私語が多い。先生もそれを注意していないようにみられた。 ・基本的な学習規律を見直すことは、大切であると思う。昨年はなかった学習規律に関することを指標に挙げたことは評価できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・普段の授業を公開し参観をすることは、授業改善に一定の成果がみられた。来年度は全職員の授業公開、参観回数を増加し、実施していく。 ・日々の児童との関わりや観察、学力調査等から実態を把握し、それを踏まえた対応・対策を考え、実践していく。 ・多様な個々の特性に合わせ、柔軟な指導を心がける中で、落ち着いて学習できる環境・規律づくりを目指す。 ・課題解決に向けた「対話」と「私語」を区別し、主体的・対話的な学習となるよう研鑽していく。

<p>◆ 読書活動の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・読書チャレンジ、親子読書等の推進 →子ども一人あたり年間 44 冊以上の貸し出し <p>(成果と課題)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 今年度実施した取り組みは以下の通り <ul style="list-style-type: none"> ・先生や図書委員のおすすめの本, 読書チャレンジ, 親子読書などの読書イベントの実施 ・読み聞かせボランティアの方や図書ボランティアの方のご協力 ・図書巡回指導委員との連携 ・座卓の読書スペースや図書のクラスルームの新設 ○ 12月現在で, 子ども一人あたり年間 35.5 冊の貸し出し(昨年度は 12月現在で 29.7 冊) ○ 学年修了時: 子ども一人あたり50.97 冊の貸し出し 全校で 35,022 冊の貸し出し実績があった。 <p>△保護者の方のアンケート結果「お子さんは進んで読書をしているか」「はい」25.9%「どちらか」といとはい「29.5%計 55.4% →進んで読書活動している児童が半分程度である。)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・紙からの知識をぜひ進めてほしい。 ・読み聞かせボランティアの方や図書ボランティアの協力が一定の成果を上げている。 ・ボランティア活動をより一層活発に活動していきたい。 ・小学校からの読書本以外の稲生公民館からの読書本、江島児童図書館からの読書本等の活用等も推進させてはどうか。 ・親子で一緒に借りてきて読書をするのもよい。 ・座卓の取り組みはよい。 ・読書離れが進む中で、読書活動の推進のために、いろいろな取組を進めてきたことは評価できる。 ・読書・メディアの活用・家庭学習の習慣化、スクリーンタイムの縮減という課題を包括的に考え、相乗効果が期待できるような取組を児童や家庭に提起していくことが求められる。 ・何とか読書への職員・地域の思いを伝えられていると思う。「読書のまち・いのう」を目指そうと思っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの読書への意欲を高める活動を引き続き考え、実施していく。 ・図書室のスペースが限られているため、新校舎の階段下等、移動図書館(図書室とは別に図書の本を置く場所を設ける)の取り組みを実行していく。 ・冬休み期間も図書の貸し出しを行う。 ・公民館等の読書本の紹介を行う。
--	--	--

I T C の 活 用	<p>◆ ICT機器を効果的に活用した学習活動の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・対話的・協働的な学びを生むICT機器の活用実践 :校内公開1回以上 <p>◆ ICT機器の活用に関する研修</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2ヶ月に1回のICTミニ研修会 <p>◆ ICT機器の活用した家庭学習</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ICTを活用した宿題の実践 ・学期毎に1回、交流を行う <p>◆ ICT機器を効果的に使うための外部との連携</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ICT支援員を活用した、授業を定期的に行う ・授業における ICT 機器の使い方を支援員に相談する時間を設ける <ul style="list-style-type: none"> →ICT ミニ研修会においてアドバイスをいただく ・年間5回中学校区で会議を行い、近況を交流する <p>(成果と課題)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 各学年の発達段階に応じた ICT 機器の活用を行うことができた。 ○ 家庭学習も復習として用いるだけでなく、予習として取り組むことができるようになってきた。 ○ ICT 支援員と連携し、月に1度の研修を開き、教員のスキル向上に繋げることができた。 ○ ICT を用いて他校や他の公共機関とオンラインで繋ぎ授業を行った。 <p>△ 各学年の取り組みを知る機会をより増やす必要がある。</p>	<p>・ICTを活用した学習が進んできたことがわかる。児童には、ICTを活用した学習が定着してきていると思う。</p> <p>授業改善とも関わって、効果的なICTの活用を学年、教科等のチームとして共有できることが望ましい。</p>	<p>・ICTを用いた家庭学習について、復習型だけでなく、予習型・連携型に取り組んでいく。</p> <p>・互いのITC活用実践を報告する場を複数回、設定する。共有した活用方法を実践し、再び共有するサイクルを作る。</p>
長 欠 減 少	<p>◆ 仲間づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一人ひとりの思いに気づき、受け止め、ともに考える仲間づくり <ul style="list-style-type: none"> →生活について綴らせる「あいノート」の全校での継続的な取り組み ・いじめの未然防止、早期発見 <ul style="list-style-type: none"> →学期ごとのいじめアンケート、個別面談の実施 →いじめ件数の減少:R4年度8件 →人権カリキュラムの作成、それに基づいた体系的な指導 		<p>・1学期に人権部・生活指導部合同の「学級づくり」についての校内研修を行う。</p>

<p>(成果と課題)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ いじめ件数:R5年度(11月現在)7件 ○ 「あいノート」は児童理解や子ども同士または子どもと教師をつなぐ手立てとして、有効だった。来年度も継続する。 △ 書く時間を確保することが課題。 △ 作成したカリキュラムだけでなく、学年やクラスの課題に応じた人権学習も実施する必要がある。 <p>◆ 長欠児童の減少</p> <ul style="list-style-type: none"> ・職員間、職員と保護者間での情報共有に努め、早期発見・早期対応 →朝の欠席・遅刻連絡体制の見直し →児童生徒理解・支援シートの作成および活用 →欠席30日以上の子どもの減少:R4年度7人 →ケース会議にて、不登校対策 <p>(成果と課題)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 主な欠席・遅刻連絡方法をフォームでの連絡に変更した。即座に職員間での情報共有ができる状態となり、複数の職員で早期対応しやすくなった。 ○ 児童生徒理解・支援シートをケース会議にて活用することで、より児童を把握した中で会議を進めることができた。今後は児童だけでなく、児童を支える保護者も含めた支援に繋がるよう、ケース会議の持ち方を改善していきたい。 △ 児童理解・支援シートへの記入が日常化できるよう、今後も活用の推進を図っていく。 △ 欠席30日以上の子どもの数(11月現在)21名 <ul style="list-style-type: none"> ・21名は帰国や入院などを含めた人数。 ・出席停止の扱いが今年度変更になったことも、上記の人数増に大きく影響している。(昨年度は風邪症状で登校しない場合は出席停止扱い。出席停止を含めた場合、昨年度の30日以上登校しなかった子どもは24名) ・10日以上欠席人数は昨年度177名に対し、今年度は11月現在で65名。 △ 子どもらが安心できる居場所としての学級、学校になるよう、仲間づくりや授業づくりを中心に研修を推進する必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・昨年度になかった長欠児童の減少を指標から取り上げたことは評価できる。 ・よろしくお願ひしたい。地域でできることを探っていく。 ・職員間での情報共有ができる状態となり、複数の職員で早期対応しやすくなったことは評価できる。 ・減少したのは良いことだと思う。内容を知りたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「あいノート」の活動を継続し、児童理解や仲間づくりに活用していく。学年で書く時間を決めて取り組んでいく。 ・次年度も、人権カリキュラムに加え、学級の課題に応じた人権学習を継続する。 ・生活科や総合の学習の中で、家庭や地域を題材として、関わりを深めたりすることで、家庭や地域から大事にされている自分に気づかせる。 ・いじめアンケートでのいじめ件数の認知は、昨年度より増加している。小さなことでも「いじめ」と認知して、丁寧に対応していくことを来年度も継続していく。 ・聴き取り方やメモの取り方を学校全体で共有し、学年での複数対応を徹底していく。 ・気になる子どもの思いや生活背景、保護者の願ひなどを家庭訪問を通して、丁寧に聴き、「安心できる仲間・居場所づくり」に努める。 ・不登校対策担当を特別支援コーディネーターと低中高学年から担当を選出し、情報共有・協力しやすい体制をつくる。
--	--	---

◆ 地域素材を生かした教育活動の創造

・子どもたちが地域に関心を持ち、地域から学ぶ授業づくり

→地域人材、地域教材を活用した教育活動（各学年3回）

・子どもたちに地域のことを知ってもらう機会として、現在推進中の地域学習（出前授業）継続して欲しい。

・地域の人にとっても、児童に気軽に声掛けができるようになっている。見守る目は多い方がよい。

・昨年以上に地域を題材にした教育活動に取り組むことができたことは評価できる。

・数値としては、まだまだ学年によって差がある。

・地域学習がまだ定着しておらず「出前授業」で終わってしまっている。

・先生たちがどんなことを学ばせたいのかという目標が依頼者にはっきり伝わってこない。

・「児童自らが地域の事物から問いを持ち、地域の方と繋がりながら探究的に学んでいく学習」に取り組むには、各学年が今年度の成果と課題を次年度に引き継いでいくことが重要である。

・ピンポイントで話を聞くだけでなく、指導計画のおおまかな見通しを立てて授業を展開することが望ましい。

・ゲストティーチャーとしてお話を聞かせていただくだけでなく、児童自らが地域の事物から問いを持ち、地域の方から、繋がりながら探究的に学んでいく学習に転換していく。

・地域学習をする際、打合せ等で、地域の方々に、学習においての目的や展開を共有し、教員主導で学習していく。

・地域の資源を活用した地域学習の年間カリキュラムを作成していく。

◆ 保護者、地域への学校情報の積極的発信

- ・学校HP、メール配信による情報発信
(年 100 回以上)

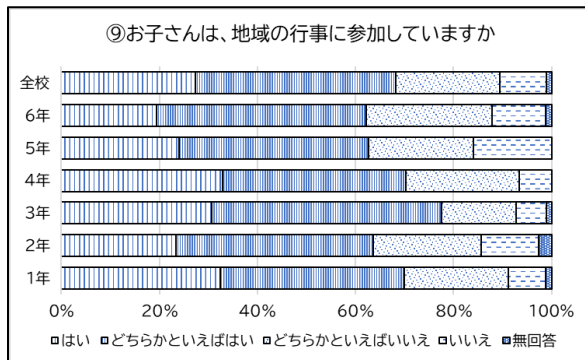
○ 細かなメール配信により、学校の情報を伝えることができた。

◆ 地域行事への積極的な参画

- 職員、児童、保護者の参加(年1回以上)
(成果と課題)

- 各学年 3 回以上の地域を題材にした教育活動に取り組むことができた。
- 地域人材を積極的に活用し、子どもたちの身近なところから学びを深めることができた。

・保護者アンケートより



・学校の地域学習の教材の活用・カリキュラム化には、地域と学校が「どんな子どもを育てたいのか」という目標を共有し、教材化していく必要がある。話し合う場が必要ではないか。

・子どもたちがどんなことを学んだり考えたりしたのか、地域にもっと伝わるとよいと思う。

・地域行事：一般の教員の方の参加がもう少しあればと思います。

・地域行事に教職員もぜひ参加してほしい。

・夢協が主催している行事などに1回/年以上の参加を親子で参加する。

- サマーフェスタ
- 収穫祭
- たこあげ大会
- 稲生の名所・旧跡めぐり
- 等

・年に1回以上は地域の行事や祭りに参加するなど、教員自らが地域に興味を持ち、地域から学ぶ。

- ◆ 教職員、児童の危機管理能力の向上
 - 職員訓練の実施(年3回)
 - 不審者対応、生活事故対応、
保護者への引き渡し訓練の実施:各1回
 - 危機管理マニュアルの見直し:1回以上

(成果と課題)

- 不審者対応マニュアル、緊急時の引き渡しマニュアルの見直しを行った。今後は危機管理マニュアルに一元化していくとともに随時見直しを図っていききたい。
- 職員による不審者対応訓練を実施、児童を含めた訓練を行った。3学期には、児童の生活事故対応訓練の実施を予定している。来年度以降も様々なパターンで訓練を行い、危機管理意識を高めていきたい。
- △ 引き渡し訓練を実施したが、時期が2学期であったため、次年度は年度初めに実施できるよう計画していく。

・地震に対する対応マニュアルを特に感じた新年。学校にお世話になると、北陸の現場を見て感じた。

・年始の地震で、地震災害時の危機管理について改めて考えさせられた。避難方法や児童のケアなどについて再確認するとよい。

・職員による不審者対応訓練を実施して、マニュアルを見直したことは評価できる。具体的な事例を想定した内容に改善されている。

・校庭の改修が実現できそうなので、早期にすませて、来年度は迎いの自動車のスムーズな進路を確保できるとよい。

・防災ノートを活用し、学校生活以外で災害に遭遇したときに自身で考え、行動する力を養う。

・引き渡し訓練を5月に実施する。

・不審者対応訓練について。次年度は教育支援課や警察などの関係機関等に依頼し、第三者を交えた訓練にする。

◆ 家庭学習の習慣化

・家庭学習が「がんばり週間」の継続的な取り組みと周知

(成果と課題)

- テスト前など自主的に家庭学習に取り組み、学習に向かう力として評価することができた。
- 掲示板などに紹介してもらうことで、啓蒙につながった。
- 主体的な興味関心に応じたバラエティ豊かな学びが見られた。
- △ がんばり週間以外にも継続してほしいが、なかなか難しい実態がある。
 - ・協力的な家庭とそうでない家庭との取り組みの差が大きい。
 - ・宿題だけで精いっぱいの子供も少なからずいる。
 - ・自主学習ノートの活用法(自主的に提出するのが本筋であろうが、任せていると全くしない子供も多い。)
- △ 家庭学習について、保護者とも議論を深め、子どもの自主性や主体性を育むあり方へ変換を図っていく必要があると考える。

・学校から発信しても、とらえる家庭によって様々な対応となるので、協力を呼びかけていく必要がある。

・提起された「家庭での学習時間についての取組(案)」の具体的な改善案のうち、まずどれかを取り組んでみて、成果と課題を明らかにしていくことで1歩進むと思う。

・自主学習は簡単に課題を見つけれられる子の方が少ない。基本をしっかり学べる方向の家庭学習に重きを置く方が取り組みやすいのでは。

・せめて宿題だけでもする様に少しボリュームをUP。

・環境の変化によって考え方に変化が生まれる。自主的に勉強をする姿勢を見せなかった子が姉(高校受験)の姿(勉強のスケジュール)を作成して取り組む姿を見て、少しずつ変化が生まれている。本人以外の日々の行動変化により変わると感じた。

・家庭学習について、学校運営協議会の議題として討議したことはよかった。継続して議題として取り上げ「子どもの自主性や主体性を育むあり方」について、学校と保護者双方が改善点や問題点を出し合っていくことはよい。

・自主性・主体性に重きを置きすぎて学力低下につながるよう、注意が必要。

・学年通信やマチコミメールでの啓発を続ける等、家庭との連携を深めていく。

・家庭学習が「がんばり週間」とノーマディアデーと連携させる。

・PTAとも協議を行い、家庭学習の在り方について保護者とともに深めていく。

・学年に応じて、できることから「主体的にとりくむ家庭学習」を実践していく。

◆ スクリーンタイムの削減

- ・中学校区で連携したノーメディアデーの設定
- ・学校だよりで保護者へ周知・啓発、ノーメディアデーの継続的な取り組みと指導

(成果と課題)

- 空いた時間を家庭学習や読書、家族と過ごす割合が多い。使わない割合がノーメディアデーの回数を重ねるたびに多くの学年で増加した。
- △ 目標値を設定して取り組んでいるが、4、5、6年生に課題がみられる。

・メディア、ゲームなどを少なくする取り組みを

・ノーメディアデーの年間回数を少しずつ増やすことにより、どの様に時間を有効に過ごすかを考えさせる機会を作る事も必要。

・保護者と協議・連携を深め、啓発に取り組み、家庭学習がんばり週間と合わせて指導を継続していく。

◆ 「チーム稲生小」として、主体的・組織的に行動する教職員、職場づくり
 ・報告、連絡、相談の徹底。情報共有、組織的な対応を実現するための対話の推進
 →全職員が1日10人以上と対話

◆ 健康で前向きに働ける職場づくり
 →月45h、年360hを超える時間外労働：0人
 →定時退校日の時間外勤務：10%未満
 →60分以内に会議を終了（職員会議、校内研修を除く）：100%

（成果と課題）

○ 1日10人以上との対話の達成92%（教職員アンケートより）今後も報告、連絡、相談の徹底を図っていく。

△ 月45h、または年360hを超える時間外労働をした職員 3人

△ 業務の効率化、教育活動の保護者・地域との共助を一層推進していく必要がある。

・「『チーム稲生小』として、主体的・組織的に行動する教職員、職場づくり」を指標としていくことは望ましい。

・目標は共有した上で、地域に頼めることは地域に頼んで、よい職場をめざしていただきたい。

・働き方改革を進めてほしい。

・過労働の減少を

・学年部、四部会を中心とした組織で主体的に行動できる教職員集団づくりを推進する。

・校務分掌や業務内容について見直しを図り、子どもたちの学びに必要な教育活動を精選していく。